

## 【論文】

# テレ表情の表出が受け手に与える影響

## —会話場面に着目した実験的検討—

木村 圭佑(岩手大学大学院総合科学研究科)

奥野 雅子(岩手大学人文社会科学部)

### I. はじめに

普段、恥ずかしい感情や照れくさい感情を表出することについて、どう考えているだろうか。それらの羞恥感情は、ただうつむくハジと笑いを伴うテレの2つの表情によって、他者に伝えられている。

羞恥感情は誰もが日常的に経験する情動であるが、その情動に伴う表情の有無によって、相手に与える印象が異なるとされている。具体的には、相手に迷惑をかけてしまった際、ハジのように笑いを含まない表情をみせることで、謝罪の気持ちを伝えることができる一方、笑いを含むテレは反省している気持ちをうまく伝えることにつながらない。また、羞恥だけに限らず、表情は相手との関係性によって異なってくるほか、表情も2者間における認知に影響を与える可能性がある。

そこで、本研究では羞恥表情の1つであるテレ表情の表出が受け手に与える影響について、会話場面に着目して検討することを目的とする。

### II. 問題と目的

#### 1. 羞恥とは

羞恥については、これまでの研究において、様々な定義がなされてきている。樋口(2000)は、因子分析を用いて羞恥感情の構造を調査し、羞恥とは「無意図的なあるいは自らの望まない苦境や逸脱を意識した際の情緒的な反応」と定義している。また、佐々木(2005)は、羞恥を行動基準と現実自己のずれや、他者との関係性によって規定される、失態を演じたときに体験する感情と定義している。これらの定義をもとに、本研究では羞恥を「行動基準と現実自己とのずれや、他者との関係性によって規定される、無意図的なあるいは自らの望まない苦境や逸脱を意識した際の情緒的な反応」と定義することとする。

#### 2. 羞恥の類型について

これまでの研究において、羞恥は感情・表情・状況という3側面から類型化がなされている。まず、感情の類型について、菅原(1992)によると「社会的に受け入れられない自己像が露呈したときには恥が、他者になじみのない自己像が露呈したときには照れが生じ、それらはコミュニケーション不安と合わせて対人不安にまとめられる」とされている。

次に、表情の類型について、羞恥の基本表情はハジ・テレ・ハジ+テレの3類型が存在

するという知見が示されている(菅原, 1998)。菅原(1998)によると、ハジは「口元がへの字にゆがむ、または固く閉じた状態が特徴的」な表情、テレは「笑顔にみられるように口角が上がり、緩やかに閉じたまぶたが特徴的」な表情とされており、ハジ+テレは以上の2つの表情が混じり合ったものであるという。これらの表情については、福田(2016)によって図式化され、質問紙による羞恥表情研究で用いられている。羞恥表情の種類を図1に示す。

さらに、樋口(2002)は、羞恥状況の種類について状況による分類を行い、「自らの行動等について反省する私恥系状況、自分の劣位性が公衆の面前で露呈する公恥系状況、ポジティブな評価あるいは相互作用に戸惑う照れ系状況、人前での自分に自信が持てない対人緊張系状況、対人場面において自己の役割が混乱している対人困惑系状況、そして性の顕在化が戸惑いをもたらす性的状況が存在する」と述べている。したがって、本研究で扱う状況は、「ポジティブな評価あるいは相互作用に戸惑う」状況であるテレ表情であるといえる。



図1 羞恥表情の種類(福田, 2016)

### 3. 羞恥の表出者に関する研究

福田・樋口(2016)によると、公恥状況を経験した者は、それを観察していた中程度の親密関係の者から羞恥状況のユーモア化をされることで、羞恥感情が低下することが示されている。また、共感性と羞恥・罪悪感の関係についての研究では、罪悪感特性が高い者は、自発的に相手の立場に立ち、不幸な人々に対して共感的関心を抱く傾向があり、羞恥特性が高い者は他者が苦痛を感じると、自動的な自己の置き換えによって不快感を抱く傾向があることが示されている(有光, 2006)。さらに、佐々木ら(2005)は、「同じ失態を目撃されたとしても、羞恥を最も強く感じるのが中間的な親密度の“セケン”に対してである」(井上, 1977)という知見をもとに、特定の場面における羞恥心と観察者との心的距離の間に、逆U字関係が存在するという仮説を検証する研究を行った。その結果、心理的距離が中程度の観察者に対して、人は最も強い羞恥感情を感じやすいことが示されたほか、対人不安についても同様の関係性の者に対して強くなることも示された(佐々木ら, 2005)。

### 4. 羞恥の受け手に関する研究

福田ら(2014)は、公恥の表出者に対して観察者が行う評価や行動について、表出者の表情による違いが存在するののかという点に着目して研究を行った。なお、羞恥表情については、菅原(1998)の“ハジ・テレ・ハジ+テレ”の3種類が扱われた。その結果、公恥状況の後に、行為者が笑いを含んでいるハジ+テレ表情やテレ表情を表出すると、ハジ表情や

無表情に比べて、可笑しさや高い社交性など、ポジティブなパーソナリティ評価や心的状態が推測されることが示された（福田ら, 2014）。

また、Miller(1987)は“Empathic Embarrassment”とよばれる羞恥について、検討を行った。“Empathic Embarrassment”とは、「自分の社会的アイデンティティが脅かされていないにもかかわらず、他人に対して感じる恥ずかしさ」とされている（Miller, 1987）。さらに、行為者が羞恥を感じる課題を実施した際、それを観察していた者にも羞恥感情が生じることが報告されている。加えて、行為者に共感するよう教示されていた観察者群のほうが、客観的に観察するよう教示されていた観察者群よりも羞恥感情を感じていたことから、共感を媒介して生じる羞恥が存在するとされている（Miller, 1987）。

## 5. 2者関係が表情に与える影響

羞恥表情と2者関係について扱われた研究は、管見の限り存在しないが、その一方で羞恥以外の表情と2者関係についての検討は数多く行われている。まず、山本・鈴木(2008)は2者関係の発展過程において、表情の表出がどのように変化していくかを実験的に検討した。その結果、対人関係が形成されるに従い、2者の相互作用が促進されて笑顔や視線が多く表出されるようになり、対人関係における回避的な動機が低減されることが示された（山本・鈴木, 2008）。

次に、井上ら(2020)は親密な関係である親友ペアと恋愛ペアに対して、快感情・不快感情それぞれが生起する映像を視聴してもらい、視聴後に感情状態に関する質問紙への回答をもとめた。また、映像視聴中の表情について、笑顔・眉しかめに着目して分析を行った。その結果、笑顔がペアで同時に生起している時間は、恋人ペアにおいて最も多いことが示されたことから、親密な関係にある他者の存在が笑顔表出を促進させると考察されている（井上ら, 2020）。

一方、恋人と不快刺激映像を視聴した後は、親友と不快刺激映像を視聴している際よりも、眉しかめの累積時間や頻度が低いことが示されたほか、社会的動機のうち「パートナーの行動が気になった」程度が恋人ペアより友人ペアのほうが低かった（井上ら, 2020）。このことについて、恋人ペアについて、パートナーの行動が気になるといった顕在的側面に注意を向けているが、それに伴って自身は表情表出を行わないことが示唆されたとしている（井上ら, 2020）。

## 6. 本研究の目的

これまでなされた研究より、羞恥には様々な発生状況や表情が想定されることや、羞恥表出者の表情の種類によって、受け手の表出者に対する認識が異なることが示されている。また、羞恥の受け手からの反応によって、表出者の羞恥感情が増減することも報告されている。加えて、相手との関係性によって表出される表情が変化することも明らかとなっている。

しかし、従来の研究では、関係性が羞恥に与える影響については検討されているものの、羞恥が関係性に与える影響についての検討は見当たらない。また、羞恥が公的場面で生じ

たことを想定した研究は行われているが、二者の会話場面において生じる羞恥に着目した検討は行われていない。さらに、羞恥感情に着目した研究は数多くなされているが、その表情の差異に着目した研究は十分とはいえない。特に、テレ表情は先行研究において、対人関係へ肯定的な影響を与えることが示されているため、二者の会話場면을対象とした実験的な検討を行う意義があると考えられる。

そこで、本研究では、テレ表情の表出が受け手にどのような影響を与えるのか、二者の会話場面に着目して検討することを目的とする。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 予備調査

2者の会話場面において、テレを感じる状況について調査し、本実験の設定に必要な情報を収集することを目的に、大学生・大学院生 52名(有効回答数: 51名 男性 17名、女性 34名、 $M=21.6$ 歳、 $SD=1.26$ )を対象とした質問紙調査を実施した。会話場面において、テレを感じた経験の有無、その時の会話内容、会話の相手との関係性について自由記述式で回答を求め、得られたものをKJ法によって分類した。その結果、会話内容について回答が多かった「相手の能力」「相手の人間関係」「相手の内面」と、会話の相手との関係性については「同性の友人」の組み合わせを採用し、予備実験を設定することにした。

#### 2. 予備実験

本実験で用いる会話の話題と設定するペアの関係性を決定するため、大学生の友人ペア 5組 10人を対象にペアでの対話実験を行い、テレ表情が生起するか否かを試行した。実験は話し手と聞き手に分かれて行うものであり、実験当日にペアを無作為に両役割へ振り分け、担当してもらった。実験前には、予備調査で得られたテレ表情が生起しやすい会話内容である「相手の能力」「相手の性格」「相手の人間関係」のいずれかを話し手に選んでもらった。なお、実験前の教示では、「相手の表情や自分の表情がどのようなものであったか、少し意識してみてください」と伝えた。

予備実験の結果、テレ表情の表出が十分に確認されたことから、本実験においても引き続き同様の話題を用いることとなった。

#### 3. 本実験

##### (1) 調査協力者

大学生・大学院生の友人ペア 20組 40人を対象とした(男性 11組、女性 9組、 $M=21.5$ 、 $SD=0.97$ )。

##### (2) 調査時期

2021年12月～1月

##### (3) 手続き

協力者を募り日程を調整し、その協力者にペアの同性友人1名を連れてきてもらった。実験は話し手と聞き手に分かれて行うものであり、実験当日にペアを無作為に両役割へ振

り分け、担当してもらった。実験前には、予備調査で得られたテレ表情が生じやすい会話内容である「相手の能力」「相手の性格」「相手の人間関係」のいずれかを、会話前に配布した教示文の中から話し手に選んでもらった。なお、教示文には「相手の表情や自分の表情がどのようなものであるか、意識してみてください」と記載し、実験中の表情へ意識を向けるよう促した。実験終了後に、羞恥感情と友人関係認知を測定する項目に加え、相手と自分の羞恥表情の程度の認知を測定する項目への回答を求めた。

なお、ペアにはテーブルを挟んで向かい合うように着席してもらい、互いの質問紙や教示文が見えないように衝立を設置した。

#### (4) 質問紙の構成

##### ①フェイスシート

- ・性別および年齢

##### ②会話中の相手の表情や自分自身の表情に関する認知（5件法）

- ・会話中、相手は照れていましたか。相手の会話中の表情を思い出して回答してください。
- ・会話中、あなたは照れていましたか。会話中の自分の表情を思い出して回答してください。

##### ③羞恥測定項目（樋口, 2002）

「混乱的恐怖」「自己否定感」「基本的恥」「自責的萎縮感」「いたたまれなさ」「はにかみ・もどかしさ」の6つの下位尺度からなる。計24項目5件法で回答を求めた。

##### ④友人関係機能尺度（丹野, 2008）

「安心・気楽さ」「娯楽性」「関係継続展望」「情緒的結びつき」「相談・自己開示」「支援性」「肯定・受容」「学習・自己向上」「人生の重要な意味」の9下位尺度からなる。計45項目5件法で回答を求めた。

#### (5) 分析

実験場面をビデオカメラに収め、会話開始後、話し手が聞き手についての賞賛を開始してから2分間を分析対象とし、2者のテレ表情の生起率をそれぞれ算出した。テレ表情については、菅原（1998）が羞恥表情に関する調査を基に作成した、テレ表情を示した図を参考に、「笑いながら、相手から視線をそらす表情」もしくは「笑いながら、目をつぶる表情」として計測を行った。計測したテレ表情から生起率を算出した。テレ表情の生起率は、分析者がストップウォッチで測定したテレ表情生起時間(秒)を、120秒で割って算出した。受け手の表出者に対するテレ表情認知の程度を、中央値で高群・低群にわけたものを独立変数、受け手の羞恥感情を従属変数として、対応のないt検定を行った。また、表出者のテレ表情の受け手の羞恥感情、表出者のテレ表情と受け手の友人関係認知の相関について検討を行った。

## IV. 結果

### 1. テレ表情の表出が受け手の羞恥感情に与える影響

受け手の羞恥感情を従属変数として、受け手の表出者に対するテレ表情認知（高群/低群）を独立変数とし、対応のないt検定を行った。その結果、「いたたまれなさ」( $t(18)=1.914$ ,

p<.10)について、表出者のテレ表情認知の高群のほうが低群に比べて高い傾向であることが示された。この結果を図2に示す。また、受け手のテレ表情の要因を除外し、表出者のテレ表情生起率と受け手の羞恥感情について、偏相関分析を行った。その結果、「自責的萎縮感」(r=-.550, p<.05)と「はにかみ・もどかしさ」(r=-.574, p<.01)との間に、有意な中程度の負の相関がみられた。この結果を表1に示す。

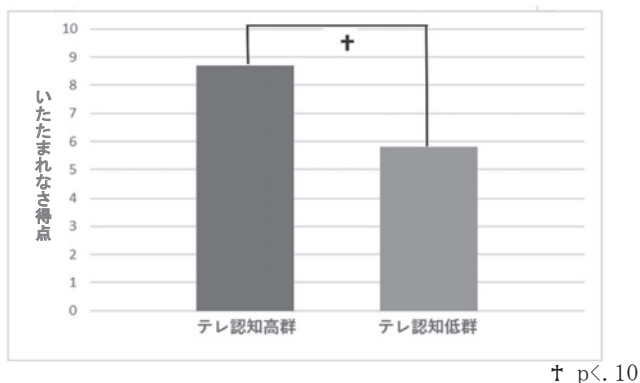


図2 羞恥感情の「いたたまれなさ」の平均値

表1 受け手のテレ表情を制御した表出者のテレ表情と受け手の羞恥感情の偏相関

|                 | 混乱的恐怖   | 基本的恥   | 自責的萎縮感  | はにかみ・もどかしさ |
|-----------------|---------|--------|---------|------------|
| 表出者の<br>テレ表情生起率 | -.439 † | -.429† | -.550 * | -.574**    |

† p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01

## 2. テレ表情の表出と受け手の友人関係認知の関係

受け手のテレ表情生起率の要因を除外し、表出者のテレ表情生起率と受け手の友人関係機能について、偏相関分析を行った。その結果、「安心・気楽さ」(r=.477, p<.05)「情緒的結びつき」(r=.648, p<.01)「相談・自己開示」(r=.594, p<.01)「支援性」(r=.573, p<.01)との間に、有意な中程度の正の相関がみられた。この結果を表2に示す。

表2 受け手のテレ表情を制御した表出者のテレ表情と受け手の友人関係認知の偏相関

|                 | 安心・気楽さ | 情緒的結びつき | 相談・自己開示 | 支援性    |
|-----------------|--------|---------|---------|--------|
| 表出者の<br>テレ表情生起率 | .477*  | .648**  | .594**  | .573** |

\*p<.05, \*\*p<.01



## V. 考察

### 1. テレ表情の表出が受け手の羞恥感情に与える影響

表出者のテレ表情が受け手の羞恥感情に与える影響について、表出者がテレ表情を表出するほど、受け手のいたたまれなさを高める可能性があることが示唆された。本実験において、相手を褒めることを教示された表出者は、樋口(2002)による羞恥場面のうち、対人困惑状況におかれていたと考えられる。その状況では、「いたたまれなさ」などの感情が生起するとされており、今回は受け手が表出者のテレ表情を認知することで情動伝染が生じ、受け手にも同じ感情が生じたと考えられる。

また、賞賛が行われる会話場面において表出者がテレ表情を表出することで、受け手の羞恥感情のうち、「混乱的恐怖」「基本的恥」「自責的萎縮感」「はにかみ・もどかしさ」が低減されることが明らかとなった。この結果は、福田ら(2014)による、ハジ+テレ表情やテレ表情の表出者からは、ポジティブなパーソナリティ評価や心的状態が推測されるという先行研究を支持している。また、「混乱的恐怖」は対人緊張状況において高まりやすく、「基本的恥」と「はにかみ・もどかしさ」はテレ状況において高まりやすいとされている。したがって、相手を賞賛する際にテレ表情を表出することは、受け手が緊張する場面や照れる場面で生じやすい羞恥感情を低減させる効果があると考えられる。

### 2. テレ表情の表出と受け手の友人関係認知との関連

表出者のテレ表情が受け手の友人関係認知へ与える影響について、表出者のテレ表情の表出が、受け手の「安心・気楽さ」「情緒的な結びつき」「相談・自己開示」「支援性」の認知を促進する可能性が示された。しかし、木村ら(2012)によると、情緒的なつながりは、一度のコミュニケーションでは変化しにくいとされている。そのため、賞賛を行う際に表出者がテレ表情の表出を行うと、受け手は相談・自己開示を行うことや安心・気楽さが高まること、支援性が高まると考えられる。

また、菅原(1998)では、羞恥発生のモデルの1つとして、「期待裏切りモデル」が示されている。これは、羞恥の発生メカニズムを、「他者の期待に背くような自己像を呈示し、相手との間に心の距離ができたり、関係性が解消されたりすることへの警告信号」(菅原, 1998)と捉える理論である。すなわち、羞恥を相手からの拒否に対する予期不安として捉えていることになる。また、このモデルは他者から否定的な評価を受けた際に生じる羞恥と、肯定的な評価を受けた際に生じる羞恥を説明している。そのうち、肯定的な評価を受けた際に生じる羞恥とは、その評価の程度が過剰であると受け手が感じた場合、期待を裏切ってしまうことを恐れて生じるテレであるとしている。

このような先行研究をふまえると、テレ表情は相手に安心感を与え、羞恥が生じる1つのきっかけである期待を裏切ることへの予期不安を抑制する効果を有する可能性があると考えられる。

### 3. テレ表情に対する認知の差

分析者・話し手・聞き手におけるテレ表情の認知の差について、まず分析者が分類した

聞き手のテレ表情生起率高群においては、聞き手のうち8組、話し手のうち9組が「とても照れていたと思う」または「照れていたと思う」と回答していた。一方で、分析者が分類した話し手のテレ表情生起率高群においては、話し手のうち7組、聞き手のうち6組のみが「とても照れていたと思う」または「照れていたと思う」と回答していた。さらに、聞き手の評定については「とても照れていた」という回答が0件であり、テレ表情の認知差が大きかったといえる。

これまでの羞恥研究では、福田ら(2016)のように、羞恥表情に着目した研究は行われていたものの、それらの研究では羞恥表情の図式を調査協力者に呈示し、その後の反応を調査するようなものであった。これらの先行研究と本研究の結果をふまえると、羞恥表情という複雑な表情を実際に測定する手法にはさらなる工夫が求められるといえる。本研究においても、先行研究における質問紙調査で用いられたテレ表情の図式を作成基準として参考としたが、実際に会話で生じる表情とはやや差異が存在した可能性があると考えられる。

## VI. 総合考察

### 1. 本研究の意義

本研究の意義の一つとして、会話実験を通してコミュニケーションの相互作用の影響として羞恥表情の検討を行った点である。前述したように、これまでの羞恥表情に関する研究では、羞恥表情を図式で呈示し、それに対する協力者の反応を検討するようなものが多く、他の表情研究で行われるような実験的検討がなされていなかった。それに対し、本研究では分析者がテレ表情の測定基準を定め、表情の生起率を算出して分析を行うことができたほか、会話の当事者である実験協力者によるテレ表情の認知度ともある程度の一致が確認できた。いくつかの課題はみられたが、今後の羞恥表情の研究においても、今回行ったような表情測定方法を適用することが望ましいことを示すことができたといえる。

また、2者の会話場面におけるテレ表情のポジティブな影響について示唆できたことは成果であった。これまでの研究においても、テレ表情が社会的場面においてポジティブな影響をもたらすことは示唆されていたが、主に「公恥状況」が対象であったため、羞恥感情がどの観察者に向けられたものかについては不明確であったといえる。しかし、本研究では、2者場面におけるテレ表情の効果を示すことができたことは成果であった。本研究が羞恥表情をめぐる実証研究の知見の累積に貢献したことには意義があり、コミュニケーション研究に関する新たな展開の一助となったといえる。

### 2. 臨床への示唆

本研究で得られたテレ表情のポジティブな影響は、日常場面において適用できると考えられる。他者へ賞賛を行う際にテレ表情を表出すること、つまり、親しい友人との会話で、相手のことを褒める機会は少なからずある。しかし、賞賛には受け手の内発的動機を高めるなど肯定的な効果が見られる一方で、受け手がほめの対象に自信がない場合、羞恥感情が生起することがある(市川, 2016)。そのため、賞賛を行う際には、笑いを含んだ羞恥表情であるテレ表情を表出することで、相手の羞恥感情を低減させることが重要であると考



えられる。

また、賞賛を行う際にテレ表情を表出することで、受け手が過度な期待による羞恥を感じにくくなるため、効果的なコミュニケーションとして用いることが望ましい。日常場面だけでなく、心理学的援助場面においても相手の努力を賞賛し、エンパワーメントをする状況が考えられるが、羞恥感情が生じてしまうとコミュニケーションの阻害が生じる可能性が考えられる。その際、賞賛する感情を抑制して無表情になるのではなく、テレ表情をありのままに表出することで相手との肯定的関係と褒めの効果を促進できる。

普段の生活において、「照れることが恥ずかしい」ということはよく起こりえることであろう。しかし、そのような時であっても、自分が感じた感情を大切にすることは無意識的に豊かな表情として現れ、他者と良好な関係性を築くことにつながる。このようなことを意識することで、より肯定的な感情をもつことができるはずである。

### 3. 本研究の限界と今後の展望

本研究は実際の2者の会話場面においてテレ表情の効果を検討することができたという点で成果があったといえるが、本研究の限界と課題について以下に記述する。まず、本研究では樋口(2002)があげたような羞恥状況の種類のうち、2者の実験協力者の設定状況にあいまいな点がみられたことがあげられる。今回は話し手と聞き手にペアをわけて会話をしてもらった実験であったが、表出者と受け手がそれぞれ「テレ状況」に置かれていたのか、または「対人困惑状況」に置かれていたのか、といった点が不明確であった。そのため、実験の状況設定をより明確に教示する必要があったことが考えられる。したがって、今後羞恥表情を対象とした実験を行う際には、実験協力者が置かれる羞恥状況を統制する手法を探索することが必要といえる。

次に、本研究の実験では実験協力者に私恥感情が生じた可能性があった。これまでの研究では、私恥感情が生起する状況に着目した研究が非常に少ない。私恥は、他者がどう認知しているかにかかわらず、理想自己と現実自己の乖離によって生じる羞恥(樋口, 2001)であり、他の羞恥状況よりも個人に固着した羞恥であるといえる。そのため、個人内では変化しにくい羞恥であるといえ、心理臨床において重要な概念であると考えられる。したがって、私恥状況に焦点を当てた羞恥感情についての研究も今後必要であるといえる。

本研究における示唆は、あくまで友人関係という条件下で得られたものであり、他の2者関係においてどのようなテレ表情の影響がみられるのかは検討していない。佐々木(2005)でも示されているように、羞恥感情は他者との関係性において規定されるものであり、予備調査でも羞恥感情が生起する関係性であると回答があった「目上の人」とのコミュニケーションにおいては、羞恥表情の効果も異なる可能性がある。したがって、今後は他の関係性を設定した2者関係における羞恥表情を実証的に検討することが必要になるといえるだろう。

## <引用文献>

- 有光興紀(2006). 罪悪感、羞恥心と共感性の関係 心理学研究, 77(2), 97-104.
- 井上忠司(1977). "世間体"の構造-社会心理史への試み-NHK ブックス 日本放送出版協会
- 市川真未(2016). ほめが失敗する要因とほめストラテジーについて 創価大学大学院紀要, 165-183.
- 桑村幸恵(2009). 共感的羞恥と心理的距離 パーソナリティ研究, 17(3) 311-313.
- 木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫(2011). 関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響—関係継続の予期と関係継続の意思の観点から— 実験社会心理学研究, 51(2), 69-78.
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦(2005). 羞恥感と心理的距離との逆U字関係の成因に関する研究—対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ— 心理学研究, 76(5), 445-452.
- 樋口匡貴(2000). 恥の構造に関する研究社会心理学研究, 16(2), 103-113.
- 福田哲也・樋口匡貴・蔵永瞳(2014). 羞恥表出者に対する観察者の評価および行動—表出者の表情による違い— 感情心理学研究, 21(2), 80-90.
- 福田哲也(2016). 羞恥表出の謝罪機能に関する検討 感情心理学研究, 23, 8.
- 福田哲也・樋口匡貴(2016). 羞恥場面における観察者の行動が羞恥感情に及ぼす影響—公恥状況における影響およびその影響プロセスの検討— 感情心理学研究, 23(3), 116-122.
- 菅原健介(1992). 対人不安の類型に関する研究社会心理学研究, 7(1), 19-28.
- 菅原健介(1998). 「人はなぜ恥ずかしがるのか—羞恥と自己イメージの社会心理学—」サイエンス社セクション社会心理学, 19.
- 丹野宏昭(2008). 大学生の内的適応におよぼす友人関係機能 青年心理学研究, 20, 55-69
- 樋口匡貴(2002). 恥の構造に関する研究 社会心理学研究, 16(2), 103-113.
- 山本恭子・鈴木直人(2008). 対人関係の形成過程における表情表出 心理学研究, 78(6), 567-574.
- 井上悟・秋山学・山本恭子・水野邦夫(2020). 二者の関係性が表情表出に及ぼす影響—友人・恋愛関係の比較— 帝塚山大学心理科学論集, 3, 29-36.
- Miller, R. S. (1987). Empathic embarrassment : Situational and personal determinants of reactions to the Embarrassment of Another *Journal of Personality and Social Psychology*, 53(6), 1061-1069.